

バーチャル世相に物申す

齢を取って来ると、“世の中腹立たしいことばかり・・・”という感が強くなって来るが、このことは加齢のなせる業ではあるが、世の中の様相が何かオカシイのではないかという一理もあろう。

特に社会のIT化が進んで、情報の氾濫とカタカナ言葉の横行、何をするにもネット云々という世の中になってくると、やはり最初にその皺寄せを蒙るのはそのような流行の流れに乗れない老人という塩梅になる。

極く身近なところでも、例えば、昔は往復はがきで申し込めば用が足りた〇〇市主催△△文化講演会等の申し込みも今ではQRコードからスマホで申し込むスタイルになってきたし、また、昔は駅に掲示されていた時刻表が全く姿を消してスマホで見られたしという寸法になってきた。スマホを使えないご老体は日常生活も立ち行かなくなってきた訳である。政府も自治体も行政のデジタル化を進めて役所への申請書類などもスマホからという方向に進めているので、スマホが使えない人種は世の中から抹消される運命にある。

長い間のコロナ不況のために職員も削減され、そのために昔は人間が対応していたこの種のサービス業務も機械に取って変わられた訳で、それはそれで仕方ないことではあろうが、ロボット社会の味気なさは尋常ではない。

小生はスマホは使ったこともなく、今でもガラ携しか使え（わ）ないので、スマホの便利さを知らないからスマホを馬鹿にしているのだと人から言われるのであるが、例えばの話、電車の乗客の殆どが無表情な顔をしてスマホの上で指を滑らしている様相はこれはやはりどこかがオカシイと言わざるを得ない。昔風の小生は、例えば電車の隅で小さくなって文庫本を読んでいる乗客が居ると“頑張れ、ご同輩！”と心底からホットするのである。

皆さんがスマホで何を見ているのかは知らないが、画面の上で指を激しく動かしている様子ではどうせガセネタ情報渦巻く大海から“小魚”でも釣っているのであろうし、何かの物事を考えている様子ではない。最近では映画や演奏を視聴するのも、スマホでは“早送り短縮版”というモノがあって、友達との会話で話を合わせるためにだけスマホの画面を覗くということが流行っているのだそう。

マ、情報を見るにはスマホは便利な情報ツールではあろうが、小生には目の敵（かたき）に見えて仕方がない。IT化社会に対応できない老人の泣き言といえ、それまでであるが・・・。

さて、お断りしておきたいが、小生はIT化社会の先兵であるスマホ自体を憎んでいる訳ではないし、また、IT技術の進歩や社会のIT化自体に背を向けている訳でもない。それはそれで大変結構なことである。例えば、スーパーコンピュータの発達によって、天気予報の精度が格段に進歩し、或いはDNA解析によって医療技術が大幅に進歩するなどの科学技術上の革新やAI技術の進歩、役所や会社の事務システムの効率化、国際間のグローバル即時情報交換の発達など社会のIT化によるメリットは計り知れないものがある。

私事で恐縮であるが、小生は定年退職するまでコンピュータ業界の末席を穢していたために今はその年金で細々と生きておられるのであるから、情報業界に足を向けて寝られないということも事実である。

しかしながら、文明の利器は使い様ということもある。物事には必ず表裏もある。かつて、量子物理学の進歩が原爆を落とし、また核反応廃棄物の処理方法が無い放射線廃棄物を出す原子力発電所を作ったこと等がその良い例であろう。

上で述べたように I T 技術の進歩は便利な世の中を作った反面、世の中のバーチャル化（人心の疎外と荒廃）も齎した。ある意味では、上記の原爆や原電の被害よりももっと広範囲で（グローバルで）根が深い本質的な被害ということもできよう。

その典型が、子供の頃からスマホをイジル事に慣らされた若者は、世の中との付き合いと言えば他人との交流を対面で付き合うことができず、常にスマホ経由などのバーチャルな世界でしか付き合うことができないという弊害ではなかろうか。学校でのイジメや登校拒否、引き籠りなどはその延長線上にあると思う。このことは、人間の友人ではなく、ロボットの友人と付き合っていることと同じであろう。

リアルな世界ではなくバーチャルな世界に沈殿するということは、付き合っている世界が現実の世界ではなく自分が自分の好みに合わせて捏造した仮想の世界であるから、ここには人生の何の意味も無い。

更に言えば、バーチャルな世界が犯罪の温床になっていることも見逃せないことであろう。仮想通貨などと称するインチキもここから生まれている。

このような仮想空間を用意して、そこに客を惹き込み、実体のない御託を並べ立てて各種インチキ取引を行なって巨万の富を得ている所謂インチキ I T 商売の若社長の行く末は例のホ○エモンの例を見るまでもなかろう。

話しが飛ぶが、今の入学試験は受験生のアタマに如何に多くの多種雑多な知識が詰め込まれていて、しかもその知識の断片を繋ぎ合わせて問題の回答を如何に速く弾き出せるかという試験問題であるらしい。即ち、膨大な知識を詰め込んだ **walking dictionary** の頭が超高速のコンピュータを搭載したロボットであるかどうかを試す試験のように思われる。

入学試験に限らず、このような試験を掻い潜って来た所謂秀才が幅を利かす役所や民間会社では、高価で無益なロボットに高い人件費を払っているようなものだろう。彼らが作る政策や社業の計画は従来の方法で解が得られる枠の中でしか働かないから、安物のロボットに高い給料を払っているという馬鹿らしい結果になる。

要するに、何をするに付けても、過去の人々が敷いたレールの上しか走れない人物が如何に高度なプランを描いてみてもそれは雑多な知識の破片の膨大な山を描いた単なる絵に描いた餅であって、“心” が通っていないプランであるから、ただそれだけのシロモノにしかならないという訳である。智慧を使って物を考えるのではなく、世界中から同様な雑多な知識を寄せ集めて来て砂上の楼閣の解答を作るのに長けた人種に成り下がっている訳である。

2019 年の東大入学式の祝辞で社会学者の上野千鶴子東大名誉教授は、「(前略) あなた方を待ち受けているのは、これまでのセオリーが当てはまらない、予測不可能な未知の世界です。これまであなた方は正解のある知を求めてきました。これからあなた方を待っているのは、正解のない問いに満ちた世界です。(中略) 大学で学ぶ価値とは、すでにある知を身につけることではなく、これまで誰も見たことのない知を生み出すための知を身につけることだと、わたしは確信しています。(後略)」と述べている。

これは、天下の東大入学試験を突破してきた新入生が必ずしも自ら考える力で入試を突破してきた学生ばかりではなく、所謂 **walking dictionary** としての知識を詰め込んだ受験勉強の勝者としての入学生が多数を占めているという認識を踏まえた上での言葉であって、これからの学生としての勉強のやり方の本質を鋭く突いた祝辞であろうと思われる。

いずれにしても、実質を伴わないバーチャルな世界ではどのように行動しようとその実態は誰にも見られない仮想の別世界であり、常に避難壕に逃げ込んでいるようなものである。従って、夢か現かもわからなくなり、更に進めば人生も全てゲーム感覚の如きもの

となるのではなかろうか。そこが怠惰、自己中心、犯罪の温床になるのは理の当然であろう。

苦勞せずして得られた知識はすぐ消えていく。同じ知識の海で遊ぶなら、スマホをいじって遊ぶよりも漢和辞典の斜め読みの方がまだマシなのではあるまいか。

以上、縄文時代博物館の片隅で埃を被って佇んでいるジオラマ爺さんの独り言でした。

(2023年3月 記す)